

哲学館(東洋大学)と明治教育学の展開

清水 乞

shimizu takashi

一 はじめに—哲学館の設立

哲学館(東洋大学の前身)の創立者井上円了(以下円了と呼ぶ)は京都東本願寺の留学生として東京大学哲学科で学び、仏教界最初の文学士として、明治十八年七月東京大学哲学科を卒業した。大学卒業当時について、「本山より京都に上り教校に奉職すべしと命ぜられたれども、余は意見を具申して固辞したりき。その内容は他にあらざ、ただ仏教の類勢を挽回するには僧門を出て、俗人となり、世間に立ちて活動せざるべからず理由と東京にとどまり独力にて学校を開設せん志望とを開陳し、自説を固執して山命に应ぜざりしのみ。再三再四、問答往復の結果、ようやく本山の承諾を得るに至りたり」と述懐している(「信仰告白に関して来歴の一端を述ぶ」選集四・四九六頁)。

円了は明治十一年九月東京大学予備門に入学し、明治十四年九月東京大学哲学科に入学したのであるが、予備門在学中から大学哲学科へ進むことを決めていた。彼の述懐によると、

仏教をして再び隆昌たらしめんとするにはいかなる手段をもつてせば可なるべきかを考究し、ついに仏教復興

は實際上と理論上との二方によらざるべからざることを発見せり。しかして余は實際上の方法はしばらくこれをおき、まず理論上より改良を施さんことに着手せり。余は学理上より仏教の道理の中等以上の学者社会に説くべき価値あることを示さんとするには、いかなる学を研究せば果たして適當なるかを考察せしに、今日仏教の衰廢は一方においては理化学の流行その一原因たるをもつて、理化学に対して宗教の真理を開示するには必ず哲学によらざるべからず、また一方にはヤソ教の侵入その一原因たるをもつて、ヤソ教を排して仏教を振起するにはまた哲学によらざるべからざることを発見せり。すなわち当時余の考うるところを記すれば左のごとし。

学理上よりヤソ教を排斥するものは哲学なり

理学に対して宗教を保護するものは哲学なり

と。故に余は理論上より仏教を振興せしむるはただ唯一の哲学を研究するにあることを信じ、大学に入るにあたりて自ら哲学科を選びてこれを専修したり。(『教育宗教関係論』選集十一・四四一頁)

とある。右の文中「当時の余の考うるところ」の「当時」は円了が予備門在学时、つまり円了二十歳から二十三歳頃に当る。

大学における円了の研鑽の一端は明治十六年秋、大学三年以後の研究ノート(『稿録』)によって知ることができ。しかしこの研究ノートからは、右の引用文に続く以下の文に見られる思想的変化、つまり欧化主義から国粹主義への変化を読み取ることは困難である。

しかして余が研究中、なお一事の余が心中に浮かび出でたることあり。すなわち仏教の盛衰は国家の消長に関

係すということこれなり。何故に今日ヤソ教の世界中に勢力をたくましくし、仏教のわが国に萎縮して振るわざるかというに、これ畢竟西洋諸国の富強にして、わが国のこれに比して貧弱なるがためのみ。もしわが国にして西洋諸国よりも富かつ強ならしめば、わが国の宗旨もまた必ず世界万国の上に盛んなるや疑いなし。果たしてしからば、仏教を盛んにせんと欲せば、まずこの国を盛んならしめざるべからず。かくして余は一方にありては国家を保護する必要を感じると同時に、他方に向かいては学問上に真理を愛求するをもつて目的とせざるべからざることを感ぜり。すなわち学者としては真理を愛し、国民としては国家を護らざるべからず。この護国愛理の二大義務は吾人の最大目的なることを唱えり。

(中略) しかして余は初めにおいては単に仏教回復の一念を有し、哲学専修もこの目的より起りしが、大学在学中その考え一変して、人生の目的は護国愛理の二大義務を尽くすにあるを悟れり」(『同前書』四四一頁〜四四三頁)

卒業後の二年間、円了は、卒業直前まで指導を受けた中村正直の同人社、あるいは成立学舎女子部(心理学)、出版社開発社内の通信講学会(心理学)の講師を勤める一方、活発な執筆活動を始めている。しかし心労と過勞の為か病気がちで、熱海で療養している。この間、執筆は旺盛に続けているが、その傍ら哲学館設立の構想も練っていたことであろう。

明治二十年七月二十二日東京府知事に宛てて私立学校設置願を提出し、遂に宿願を果たし、同年九月十六日、本郷の麟祥院に哲学館を開館、翌日第一年級の授業を開始した。設置願の「設置の目的」は「本校は哲学諸科を教授し専ら速成を旨とす」、「教授法の要旨」には「全科を普通高等の二科に分ち普通科は哲学諸科の大意を教授

し高等下級は哲学に必要な関係の有する諸科を教授し高等上級は哲学諸科の一層高尚に渉るものを教授し教授はすべて邦語講義を以てし生徒をして容易く了解せしむるを要す」とあり、「教員々数」は「四名 但当分二名とし備入の節は出願可仕候」として、円了と徳永（清沢）満之の両名を届けている。この年の担当科目は不詳であるが、「第一年の科目」は論理学、心理学、社会学、倫理学、教育学、純正哲学の六科目である（以上・資料編一・上 五五による）。この学科目は翌年二月に増補改定され、その「第一年級科目并講師」によると、先の六科目に加えて儒学（孔孟学・老荘学）、仏学（仏教史・仏教論）、国学、英語初歩、論文校閲依頼の科目がある。全科目の担当者は以下の通りである（資料編一・下 二八五による）。

論理学・演繹法

文学士 坂倉銀之助（明治十九年七月卒業）

帰納法

清野勉

心理学

理論

大学卒業生 松本源太郎

応用并妖怪説明

文学士 徳永満之（明治二十年七月卒業）

社会学

文学士 辰巳小二郎（明治十四年七月卒業）

倫理学

歴史

文学士 棚橋一郎（明治十七年七月卒業）

批評

文学士 加納治五郎（明治十四年七月卒業）

純正哲学

哲学史

文学士 三宅雄二郎（明治十六年七月卒業）

哲学論（唯物論・唯心論等）

文学士 井上円了（明治十八年七月卒業）

教育学

文学士 国府寺新作（明治十三年七月卒業）

儒学

孔孟学

岡本監輔

老荘学

大学卒業生 内田周平

仏学

仏教史

生田得能

仏教論

村上專精

国学

古典科卒業生 松本重愛

英語初歩

大学卒業生 柳祐信

磯江潤

論文校閲依頼

文学士 棚橋一郎

文学士 日高真実（明治十九年七月卒業）

【「卒業生」とは明治十一年に置かれた、東京大学法・理・文科の選科修了生を指すか】

まず教科目については、円了は哲学館開館式（明治二十年九月十六日）の演説の中で歴史編纂を例に挙げて具体的にその必要を述べている。

色々の事実を集めて治乱興廢の原因を研究するには論理学規則を知らねばならぬ（中略）歴史は申す迄もなく人間社会の事柄を集めるものでありますから社会学も必要であります、それから歴史を階梯として修身学を修むるには倫理学も必要に違いない又教育の助けにするには教育の一部分も知らなければなりません又人情を觀

察したり人智に適合する様に歴史を編むには心理学の性質も知らなければなりません、して見れば歴史を編むには哲学諸科の大体を知ることが必要であります、是れが我哲学館の規則中に普通高等の二科を分て普通の部には論理心理学社会学倫理学等の諸科を設けた所以であります(以下略)(資料編一・上 九十頁―九十二頁)

云うまでも無く円了は東京大学文科大学を意識していた。事実彼が学んだ東京大学以外にモデルは存在しなかったし、教員も殆どが東京大学哲学科と帝国大学文科大学哲学科の卒業生であった。教員は第一回の卒業生である国府寺新作を初め帝国大学令直後の卒業生徳永(清沢)満之まで七年間の卒業生である。彼ら教員は明治十二年公布の教育令時代、つまり米国・英国の教育制度と思想の影響下に教育を受けた人々である。しかし既にわが国の教育思想は、政治思想の変化と共に、英米から独逸へと舵を切りつつあった。哲学館はこのような変革の時に船出したのである。何事も思想と制度が変化しても、現実の運営面ではその変化に容易に対応しないものである。哲学館が学校令上の学校(専門学校に類する各種学校)である限り、法律の遵守が経営上第一義である。しかし実際は学校のみならず教員個人も試行錯誤の日々であったことであろう。この実態に触れるには、当時の教育者の回顧談を手掛りにするのが最善の手段であるが、残念ながらこの種の文献は少ない。しかし明治期に著された日本教育史は教科書が多く、明治時代に関しては「明治維新後の教育」の章の下に、明治維新から出版年までの明治教育制度及学風の変遷を最後に述べるのが通例である。従つて個々の事例を批評し論述した明治教育史の本格的著作になると、明治末期ないし大正初期まで待たなければならぬ(例えば野田義夫「明治教育史」明治四十年、藤原喜代蔵「明治教育思想史」明治四十二年、渡部政盛「日本教育学説の研究」大正九年)。

筆者は先に、円了の教育者としての出発が「哲学」の一科目である心理学の講義であったことに触発されて、

明治期に於ける心理学研究と哲学館の関係を調査した（「教育思想の変遷と哲学館・東洋大学における心理学・教育学」円了センター年報 Vol.17）。本稿はその続編である。方法論として、最初に個々の教育史に於いて論述されている明治教育思想の歴史の変遷を紹介し、次に明治末年までの教育学者の成果（翻訳・著作）を通観して、その流れの中に哲学館の教育科目担当者の成果を位置づける。こうして哲学館教育の特色を明らかにしたいと願っている。

次節に於いて明治四十年代から大正初期に出版された教育史の著書によって「教育思想の変遷」の時代区分と内容を見ることにする。明治時代に著された教育史書は二十年代、三十年代にも参照に値する書は見られるが、明治末期の教育史書は長期に亘って、より厳しく、多くの検討と批判を経た成果であると考えられる故、次節の諸書に依ることとした。ここで云う「教育史」は、殆どが西洋と東洋、中国と日本、日本のみの古代から明治時代に亘る三種を内容のものであり、明治時代のみを内容とする教育史は藤原喜代蔵と野田義夫、渡部政盛の著書である。

【本稿で使用した明治時代の文献はすべて国立国会図書館近代デジタル・ライブラリー所収の諸本である。】

二 明治教育思想変遷の時代区分

二・一 小泉又一の説

小泉又一『教育史』（明治三十七年、『近世教育史』明治四十年と同じ）では、明治三十年代の通説に従い、次の様に学制、教育学風共に三期に分類している。

【第一編 本邦維新以前の教育、第二編 欧米近世教育史、第三編 本邦維新以後の教育】

第一章 学制の変遷

第一節 学制の頒布、第二節 教育令の発布、第三節 学校令の制定

第二章 教育学風の変遷

学制時代の学風（明治五年—明治十二年 模倣時代）

教育令時代の学風（明治十二年—明治十九年 反省時代）

学校令時代の学風（明治十九年—自覚時代）

学制時代に行われたる教育説は主として米国風なりき。即ち文部省には米人モルレー氏を聘して学監となし、之に諸学校の教則を定めしめ、又東京師範学校には同国人スコット氏を聘して教師となし、彼の国に行はるゝ教授法を伝えしめたり。又一方に米国人の著書を翻訳せしめ、之を文部省にて刊行せり。即ちウイルケルハム氏の学校通論（明治七年、箕作麟祥訳）、エス・ハート氏の学室要論（明治九年、蘭人カステール訳）、彼日氏の教授論（明治九年、蘭人カステール訳）、那然氏の小学校教育論（明治十年、小泉信吉・四屋純三郎訳）塞児敦の庶物指数（明治十一年、永田健助訳）等之なり。此等の書は何れも教育上の心得を通俗に記述したるに止まり、未だ体系を備えたる教育たるに至らず。

教育令時代に至り、ペスタロッチ、スペンサー諸氏の学説大に行われたり。即ち須氏教育論（明治十三年、尺振八訳）、倍因氏教育学（明治十六年、添田寿一訳）、如氏教育学（明治十七年、有賀長雄訳）の諸書出で、実利主義の教育論大に行われ、盛んに理科教授の価値を称揚したり。又一方には若林虎三郎・白井毅両氏の改正教授術（明治十六年編）出でてペスタロッチの開發主義の教授法行はるるに至れり。前編に述べたる如く、ペ

スタロッチ、スペインサーの学説は稍体系を具えたるものにして、之を米国風の教育説に比すれば一段の進歩せるものとす。かくの如く、学制以来ひたすら欧米の教育法を輸入するに専らにして、我が国固有の美風をも顧みざるに至りければ、文部卿福岡孝悌大いに之を憂い、明治十四年、小学校教員心得を發布して、之れを誠飾せり。又翌十五年勅撰に係る幼学綱要を各学校に賜い、之れと同時に勅諭を下され、以て本朝固有の道と支那の儒教とに由りて徳育を施すべきことを諭されたり。

学令時代に至りてはヘルバルト派の学説最も行わる。明治二十一年帝国大学雇教師ハウスクネヒト氏あり、大いにヘルバルト教育学を鼓吹したれば、之れより同派の学説漸次我が国に行われ、明治二十三年十月教育に關する勅語を下し賜い、我が邦固有の道德によりて教育すべきことを諭し給えるに及び、スペインサー、ベーン等の実利主義益々衰え、ヘルバルト派の德育主義大に行はるゝに至れり。近年またシュライエルマヘル、ウイルマン等社会的教育を入れ、教育の社会的方面を説きて以てヘルバルト派の短所を補へり。

社会的教育に二種の意義あり。一は個人を社会の一員として教育すべしということにして、一は学校の外に於て広く社会を教育すべしということとす。個人を教育して社会の有用なる一員たらしめんには之をして実業にも堪能ならしめざるべからず。茲に於て実業教育の氣運大いに勃興せり。また学校以外に於て広く社会教育せんには、図書館、博物館、動物園、植物園などの設備を要し、また演劇、講談、新聞、雑誌の改良、飲酒、喫煙の節制、公德の養成など諸種の方面に注意せざるべからず。茲に於て社会改良の方策を講ずるに至れり。又従つて教育と国家との關係を攷究し、教育事業を国家行政の重要部と見做し、行政学、経済学等の補助によりて教育行政法を研究するに至れり。

『近世教育綱（明治四十一年）』第四章 教育学風の変遷

明治の維新より学制頒布に至るまでは教科教授法は凡て新旧過渡の状態にして大体に於て徳川時代の遺風を繼承し一面に於て其宿弊を破りて実学の精神を發揮せんとせり。然れども教授の方法としては依然として素読、講義、輪読、会読等の範圍を出でず書籍の暗誦訓詁を以て学問の要事とするもの少からず。即ち概して個人教育に傾き注入の主義を執れり。政府又は諸藩にて外国教師を転用したるものありたれども著しく教授法を確信したるを見ず。当時速成を旨とし生徒をして嚴に学級を踏ましむること能わず。又其腦力を過勞したること多し。

学制実施の際には主として教授法を米国の風に倣へり。当時米国人スコットを東京師範学校に聘して小学教授法を伝習し之を全国に伝えたり。教科書、教具等凡て米国の式に依る。又米国人ページの教育論、同ノルゼントの小学教育論并に教師必読、ヴィケルシャムの学校通論の翻訳書世上に行はる。然れども未だ深く教育上の理論を咀嚼する余裕なく、主として小学教授法の実際を米国風に模せんことを努めたり。之を以て教育家は明晰に自家の教育学上の主義を自覚するに至らざりしも一般に「学問は身を立つるの財本」なりてふ個人的実利主義に傾きたる如し。又徳川時代の学問は徳育に全力を注ぎたる反動として実学の名を以て智育を奨励したり。

教育令頒布の年はより先き師範科伝習の爲めに留学したる伊沢修二、高嶺秀夫米国より帰朝し東京師範学校にて心性開発の主義に本きたる教授法を鼓吹す。是より自然主義を執れるペスタロッチーの教育学説行はる。若林虎三郎、白井毅二共著改正教授術の如きは広く此主義を普及したり。又一方に於てはベンサム、ミル等の功利主義を主としたる英国思想漸次に教育界に傳播しスペンサーの教育論大いに愛読せられ又世上に訳述せらる。スペンサーは進化論を根拠として社会有用の人物を作るを以て教育の目的とし大いに理科教授の価値を称揚せり。又

其主義を祖述したるペイン、ジョホノットの教育学も翻訳せられ米國風漸く英國風に移らんとす。この間に立ちて能勢栄は仏國人コムペーレの折衷主義の教育学を翻訳せり。

森文部大臣国家主義を標榜して教育制度の大刷新を行うに方り帝国大学文科大学内に於て独逸人ハウスクネヒト特約生の為めにヘルバルト主義の教育学を講ず。其高弟谷本富、湯原元一等爾來盛んにヘルバルトの德育主義を鼓吹し天下靡然として之に嚮かう。品性陶冶、五段教授法等は教育界の常套語となるに至る。

日清戦後ヘルバルト主義漸く衰え三十一、二年の交よりヴィルマン、ナトルプ、ベルゲマン等によりて唱導せられたる社会的教育主義之に代り、国民教科、社会教科を論ずるもの多し。又此時に方り教育学を専攻せる学者漸く多く単に欧米の学説を紹介するのみならず自家の研究を發表するものあるに至る。又教育者殊に小学教員は夏休業を利用して教育学科を講習する風習を生じ次第に穩健なる教育思想を養成しつつあるなり。

二・三 藤原喜代蔵の説

藤原喜代蔵は前掲の『明治教育思想史』（明治四十二年）の結論において明治教育思想の展開を次の四期に分けて
いる。

第一期・明治初年より十五年に至る

教育原理Ⅱ常識的実利主義 教授学説Ⅱ注入主義・自然主義

第二期・明治十五年より二十五年頃に至る

教育原理Ⅱ実利的教育説・折衷的教育説 教授学説Ⅱ開発主義

第三期・明治二十五年頃より三十五年頃に至る

教育原理Ⅱ 道德的教育説 教授学説Ⅱ 開發主義・ヘルバルト派教授説・活動主義

第四期・明治三十五年頃より四十二年に至る

教育原理Ⅱ 社会教育主義 活動主義・実験的教授説・個別的教授説

第一期

未だ教育の原理に関する学説と称すべきものもなく、唯だ僅かに福沢諭吉等の実用学の鼓吹と物質的西洋文明を崇拜する時代の風潮との為に、従来の空学を排して実利的知識主義の教育を隆盛ならしめたるに過ぎざる也。是れ吾人が此時代を指して常識的実利主義と称する所以也。而して教授説に於てはダビット・モーレー等の備外國人が極めて不十分に泰西の自然主義を紹介したるに止まり、教育の実業界に於ては尚ほ依然として在来の注入的教授術を行うもの其多きを占めたりき。(七〇八頁)

第二期

スペンサーの教育論、ペイン、ジョホノット、ページ等の教育学紹介され、茲に始めて教育の原理に関する泰西の学説を窺うことを得たり。而も此等の学説は皆共に実利主義の教育説にして、時の教育界に影響を与えたること少からざりき。尤も此時代に於て出版されたる伊沢修二の教育学と能勢栄の根氏教育学とは孰れも三育主義の折衷的教育説たりしと雖も、実業界に及ぼせる影響の分量よりいえば、固より実利主義教育説に敵すべくもあらず。殊に伊沢の学説は教授法上にこそ影響を及ぼしたれ、教育原理に関しては、殆んど全く時潮に没交渉たりしと断言するも強ち過言にあらざるなり。是れ吾人が此の時代を指して実利的教育思想の全盛時代となす所以なり。而して教授説に於ては伊沢、高嶺、白井、若林等の提唱によりて所謂開發主義なるもの流行し、一時全く全

国の教育を風靡するの勢を示したりき。而も其結果は一方に於て従来の注入的教授法を根本より払掃して、之に代ふるに心理学的基礎の上に立てる最初精練の授業法を行はしむるに至りしと雖も、他方に於て開発主義の意義を誤解して少なからざる弊害を醸成するに至れりき（後略）。（七一〇頁）

第三期

ヘルバルト学風の全盛時代にして、教育原理に關しては道德主義、教授法に於ては多方の興味、五段教授等が嘖々として持て囃されたりき。尤も此時代に於ても開発主義の余焰が尙教育界の一部に残存したること忘るべきに非ず。沢柳・立花両者の翻訳せる格氏教育学、ケルン教育学は根本の思想より言えば、ヘルバルト派に属する学説たれど、書中開発主義に言及し、且つ之を推奨したる所、四五にして止まらざるが如き、或はかの所謂哲学館事件の際に於て中島徳藏が公表せる弁解辞の中に「是れ哲学館の教授の開発的なりしことを証するものにして・・・」云々といへるが如き、皆共に其間の消息を語れるものに外ならず。然りと雖も、大体に於ては素よりヘルバルト派教授説の盛んなりしには敵すべくもあらず、世は何時の間にか、開発主義を捨てて五段教授に趨り、喋々としてチーラ、ライン等の教授説を謳歌するに至れり。

ヘルバルト派学説の隆盛は、一方に於て従来の極端なる皮相的実利思想を排撃し、道德を尊重し、品性人格の尊ぶべき所以を知らしめ、教授上に於ける教師の智識手腕を著しく進歩せしめたる功ありしと雖も、他方に於て実利実益を軽んじ、智識技能を疎んじ、我教育界の氣風をして愈々消極的因循姑息に流れしめたるのみならず、教師をして教授の形式に拘々たらしめ、却つて非心理的不自然の教授を行はしむる弊を生めり。活動主義の教授説の現われたるは適さに斯の時にあり。活動主義教授説は根本の思想よりいへば、正しくヘルバルト派の学説に属するものなりと雖も、之が説明の方法と枝葉の理論とに於ては、明かに、樋口マ独創の見あるを認むべく、従来

の消極的教授、形式万能主義、教師本位の教授を打破して、積極的教授、非形式的統一主義の教授、児童本位の教授を流行せしめて、教授界に一新面を開けり。然りと雖も此教授説も亦憂うべき一の流弊を生じたることを忘るべきにあらず（後略）。（七一二頁）

第四期

教育原理に関しては社会的教育学最も優勝の地位を占め、教授法に於ては活動主義、実験主義、個性観察を基準とせる教授説等の最も広く行われ、且つ大に研究せられつつある時代なり。尤も此時期に於てもヘルバルト派教育説、尚ほ多少の余焰を保ち、折衷的教育説も亦一部の人に依りて提唱せられたるを見ると雖も、然かも思潮の大勢よりいえば、以上の如く断言して其大体を過らざるべきを信じて疑わざるなり。而して所謂実験的教育学を指して、教育の原理に関する学説中に分類するものありと雖も、吾人は之をとらざるなり。実験的教育説は独逸のライ、モイマン等の提唱する所に係り、之を初めて本邦に紹介したるを稲垣末松となす。彼が四十年九月公表せる「近世教育学」及び同年十一月刊行せる「科学現時の進歩に基く教育要義」は共にナトルプ、ベルゲマン、ヴィルマン、ライ等の教育学を参酌して著述せるものにして、実験教育説を主張したる所すく少からずとす。之に次いで、実験的教育説を主張したるものを小西重政の「学校教育」とし、乙武岩蔵は此次ぎに来るべき提唱者なり。

天才教育、低脳^マ児教育等の提唱も此時期に至りて始めて現われたる新声にして共発展は今後にありと謂うべし。之を要するに、明治の教育思想は以上の変遷を経て今日に至れるものなれども、其思想は全部西洋の輸入にかかるとして本邦学者の独創を以て提唱喚起したる学説思想殆んど一もなしというも過言にあらず。約言すれば従来は概括して之を西洋学説輸入時代とも謂うべく、一般思想界のそれと比すれば、独立固有の思想を有せざる

点に於て大に吾人は唯刮目して今後の發展進歩を見んのみ。(七一四頁)

二・四 下田次郎の説

下田次郎『近世教育史』(明治四十四年)は最終の「第四編 本邦維新以後の教育」の第一章、第三章、第四章において、以下のようにまとめている。

第一章 社会の發展と学制の変遷

第一節 創業時代(明治初年—明治五年)

第二節 学制時代(明治五年—明治十二年)

第三節 教育令時代(明治十二年—明治十九年)

第四節 国家主義時代(明治十九年—明治二十七年)

第五節 国民自覚時代(明治二十七年—明治三十七年)

第六節 現時代(明治三十七年—)

第三章 教育学風の変遷

第一節 学制時代の学風…実利主義・米国風

第二節 教育令時代の学風…開発主義・英国風 知育全盛時代

第三節 国家主義時代の学風…欧化熱・反動 德育主義

第四節 国民自覚時代の学風…日本主義 社会的教育主義

第五節 現時代の学風・實際的・活動主義的傾向

第三章の内容は第一章の第一期から第六期各期における欧米教育の発達と我国教育の発達との比較を略説したものである（二四九頁—二五〇頁）

第四章 本邦維新以後の教育約説（二四八頁）

第一期学制以前の創業時代に普通教育の萌芽を出せしは欧州十六世紀の宗教改革を想起せしめ、第二期学制時代に米国の学風を承けて、実利主義の教育及び自然主義の教授法の唱道を見、しかも實際多く注入教育を見たるは彼の十七世紀に似たり、第三期教育令時代に英国風の实利主義及びペスタロッチ等の開發的教授法の鼓吹せられて、大いに知識の啓発に努めしは、彼の十八世紀の啓蒙時代に比すべく、第四期国家主義時代のヘルバルト派によれる道徳主義及び段階的教授法の隆盛は、彼の十九世紀に於て、この教育派の一時勢力を振るえしが如し、第五期国民自覚時代の社会的教育は、これ彼の十九世紀末葉に類へつべく、而して第六期、現時代の傾向は亦彼の現代の傾向と相等し。

二・五 入沢宗寿の説

『教育史概説』（大正十三年）第三編 本邦明治維新後の教育

【第一章 教育制度の発達は学制・教育令・学校令の三期につき概説する】

第二章 教育思想の變遷

第一節 学制時代の教育思想（実利主義—被仰出書—福沢翁）

第二節 教育令時代の教育思想（功利主義—欧化主義—反動）

第三節 学校令時代の教育思想（国家主義—ヘルバルト—教育勅語—森有礼—外山正一）

第四節 国民的自覚の時代（社会的教育学—戊申詔書—国民道德—國際的国民教育—大災後の教育）

第一節

明治初年皇学主義であつたが、学制頒布頃から米国の実利主義が盛で教授法も米国のそれであつた。学校通論、学室要論、彼日氏教授論、那然氏小学教育論、塞敦氏児童指物教など当時行われたもの皆米国人の手になつた教授法又は管理法の書である。文部省では米国人モルレーを聘して学監として諸学校の教則を定めさせ、東京師範学校には米人スコットが教鞭を取つて凡て米国風であつた。

实学主義は学制頒布と共に公布された「被仰出書」の中によく現れている。その中にいう「人々自ら其身を立て其産を治め、其の業を盛にして其の生を遂ぐる所以のものは、他なし身を修め知を開き才芸を長ずるによるなり、……日用常行は言語書算を始め士官、農商、百工、技芸及び法律、政治、天文、医療等に至る迄、凡人の管むところの事、学あらざるはなし、……或は詞章記誦の末に趨り空理虚談の途に陥り、其論高尚に似たりといへども、之れを身に行ひ事に施すこと能はざるもの少なからず、是れすなわち沿襲の習弊にして文明普ねからず、才芸の長ぜずして貧乏、破産、衰家の徒多きゆえなり……」と。この思想は我が国民の現実性、儒教の現世的思想の基礎と共に普く徹底するものであつた。

當時に於て此の実利主義を鼓吹した思想家、教育家は福沢諭吉である。翁の「学問のすゝめ」は這般の思想を

通俗に述べたもので最も広く世に読まれた。慶応義塾は翁の教育思想のあらわれで、実用的人物の教養に貢献した。

第二節

教育令時代は英国の功利的思潮の隆盛な時代であつて、ベンサム、ミルなどの功利説が行われ、それに従つてスペインの教育論が拡まり科学を重んじ、主知主義を尚んだ。須氏教育論（明治十三年）倍氏教育学（十六年）如氏教育学（十七年）などは当時訳出されたものである。当時米國に留学して帰朝した伊沢修二、高嶺秀夫の二人はペスタロッチの教育説を伝えて、教育教授の上に開発主義が這入つて来た。二氏はオエスゴ市（米）に於てペスタロッチ運動の影響を受けたのである。

当時欧化主義、崇外主義が盛んに又主知主義に偏したのを見て明治十四年に文部卿福岡孝悌は小学校教則心得の中に生徒の徳性を涵養することの必要を諭示し、翌十五年には勅撰幼学綱要が各学校に下賜され古来伝説の道徳思想がかえることになった。同年軍人へ下された詔勅にも武士道精神、国民道德の復興にすすむ機運を見るのである。

第三節

かかる機運に加ふるに学令時代に及んで独逸の国家主義が輸入せられ、教育法に於てはヘルバルト派の学説が行はれることとなった。明治二十一年独逸人ハウスクネヒト帝国大学にヘルバルト教育学を講じ、リンドネル、ケルン、フレイリヒ、フォイクト、ライン、ウーフェル等その派の著書が盛に訳述された。この派の影響は実は大なるものであった。

国家主義は前の時代から欧化主義に対して頭を抬げて来たのであったが、二十三年十月に教育に関する勅語の

下賜によって国民教育の方針が確定した。

森有礼は此の時代に於ける大教育家、教育思想家であつて米国から帰国して福沢諭吉、加藤弘之等の人々と明六社を興して思想の開発に努め、国家的見地から、世を指導した。誤解のために凶刃に斃れたのは惜しむべきである。

外山正一も彼と共に米国に留学して帰り、大学に社会学を講ずると共に一般文化教育の事業に貢献した点が多い。「日本の教育」、「教育制度論」はその教育思想を見るべきものである。

第四節

明治二十七・八年の戦役は国民的自覚を喚起し、思想文物の一転向期を造つた。それ以後を国民的自覚の時代と呼んでよからう。日本主義の運動のあつたのもその戦後である。教育思想に於てはフイエの国民的見地に立てる教育論が二十九年に訳述されている。三十年頃からはベルゲマン、ナトルプルの社会的教育学が這入つて来て、ヘルバルト派の思想が批判されるようになって来た。

三十七・八年戦役はそれ以上の国民的自覚を強めた。四十一年十月に戊申詔書の御下賜があつて実業教育、作業手工の方面を注意するに至り、同時に実験教育学の輸入は経験的研究を喚起した。又人格的教育、新理想主義の傾向も紹介せられ、同時に政治的教育の主張から立憲的教育、公民教育が唱えられた。

大正三年に起つた世界大戦は第三の国民的自覚を喚び起し、国民道徳が問題として論議されるに至つたのであつたが、同時にその後國際的思想も這入つて来、教授の方法に関してはエレン・ケイ・モンテツソリなどの流れを汲み、又デューイ等の活動主義の影響などから、自動教育、動的教育、創造教育などが力説せられた。

国民的自覚は決して排他的のものであつてはならぬ。ことにそれは合理的国民教育、國際的国民教育でなければ

ばならぬ。自動・創造の教育は同時に練習と思考とを重んずるものでなければならぬ。大正十二年未曾有の大震災大火災は中心の文物と教育機関とを灰燼に帰してしまつたけれども、それが内に省みる機会を与えたことを、せめてもの心やりとして教育はその内容充実の点に古来の主張と施設と現代の革新的傾向を参照して進まなければならぬ。

以上、明治教育思想の変遷を五人の教育学者の説によつて通観した。小泉又一説は、通説である、学制期・学令期・学校令期の「三期説」の例として最初に挙げた。次に野田義夫説（五期説）、藤原喜代蔵説（四期説）、下田次郎説（六期説）、入沢崇寿説（四期説）と続くのであるが、基調は通説の「三期説」である。明治四十年代以後の学説は我国が影響を受けた欧米の教育思想を考慮し、理念化する傾向が見られる。また、我国の政治的、社会的変化と教育思想の変化も考慮されるようになってゐる。最後の入沢宗寿の論述は大正十三年の出版だけであつて、各時期の社会問題が教育思想に影響したことを示唆し、彼の視点の広さを物語っている。

二・六 翻訳文献の一部

欧米の教育学書の翻訳は一見して明らか通り、明治十年代以前はオランダ人カステールが米国の具体的授業の手引書を翻訳し、日本人は関与しなかつたようである。十年代以後は飛躍的にジョノホットやスペンサーの体系的教育書が日本の学者によつて翻訳されているが、翻訳の時期は教育思想の第三期にずれ込んでいる。これは具体的教育現場では教育思想の普及の速度が遅いことを物語っている。二十年代はジョホノットやスペンサーの著書の翻訳が僅かに見られるが、圧倒的にヘルバルト派の独逸の教育学書の翻訳が多い。三十年代は全面的に独逸の

教育書の翻訳である。全体として、学風の変遷はノルゼント、ジョホノット(米)、スペンサー、ペイン(英)、ケルン、ライン、リンドネル等ヘルバルト派の学者(独逸)、最後にベルゲマンの社会的教育学と段階を踏むが、年代的には、必ずしも、学制期、学令期、学校令、学校令期以後の教育史的な時期区分と一致しない。

明治翻訳教育文献(表記は国立国会図書館近代デジタルライブラリーによる)

【○印訳者は哲学館・東洋大学教員経歴者】

- 学校通論ウイケルスハム著、箕作麟祥訳：〔東京〕：文部省、明七—九
教育史 ヒロビブリアス著、西村茂樹訳：〔東京〕：文部省、明八・二
小学教師必携 諸葛信澄著：補正版：東京：青山堂、明八・四【スコットの教育説】
教師必読 チャーレス・ノルゼント (Northend, Charles 1814-1895) 著、ファン・カステール (Kastel, Th. J. Van) 訳：〔東京〕：文部省、明九・七
彼日氏教授論 デウキット・ペーキンス・ページ (Page, David Perkins 1810-1848) 著、ファン・カステール訳、清水世信校、東京文部省、明九・十二
学室要論 ジョハン・エス・ハート (Hart, John Seely 1810-1877) 著、ファン・カステール訳、小林病翁校、東京文部省、明九・六
小学教育論(那然) チャーレス・ノルゼント (Northend, Charles 1814-1895) 著、小泉信吉、四屋純三郎訳、久保吉人校、東京文部省、明十・一
庶物指教(塞見敦氏) イー・エー・シェルドン (Sheldon, Edward Austin 1823-1897) 著、永田健助訳、東京文部

省, 明十一・十二

教授論(加氏) ヘンリー・カルデルウッド (Calderwood, Henry 1830-1897) 著, 甲斐織衛訳, 平野知秋校…文部省, 明十一・七

百科全書 教導説 箕作麟祥訳 京都 田中治兵衛, 明十二・三

教育論(斯氏) 斯本色ハルバルト・スペンセル (Spencer, Herbert 1820-1903) 著, 尺振八訳…東京 文部省, 明十三・四

教育学 アムブロワズ・ランジュール・フィース (Rendu, Ambroise 1820-1864) 著, 土屋政朝訳, 大槻文彦閲…冊訂東京…辻謙之介〔ほか〕, 明十六・十一

教育学(如氏) 惹迷斯如安諾(ゼイムス・ジョン) Johnof, James 1823-1888) 著, 有賀長雄訳註…東京…牧野書房, 明十八・二十

教育論講義(斯辺鎖氏) 上巻…スペンサー (Spencer, Herbert 1820-1903) 著, 小田貴雄述…伊勢崎…真理書房, 明十八

教育学(倍因氏) アレキサンドル・ペイン (Bain, Alexander 1818-1903) 著 添田寿一訳 井上哲次郎閲 東京 明十八・一

幼児教育論 ジョン・スチュアート・ミル (Mill, John Stuart 1806-1873) 著, 松島剛訳…土浦町(茨城県)…柳旦堂, 明十八・五

教育新論 ゼームス・ジョンホット (Johnof, James 1823-1888) 著, 高嶺秀夫訳…東京…東京茗溪会, 明十八・一

十九

- 教育論(斯氏) スペンサー Spencer, Herbert 1820-1903) 著, 有賀長雄訳注: 東京: 牧野善兵衛, 明十九
- 教育哲学史 クレップェル (Klopper, Clemens 1847-1913) 著, 鈴木力訳, 国府寺新作訂: 東京: 博文堂, 明十九
- 十
- 明治十九年改正教授術 汝定諾 (Johannot, James), 塞兒敦 (Sheldon, Edward Austin) 著, 高木怡荘訳 東京: 奎
- 文堂, 明十九・二十
- 岐阜師範高田教授『摘要教育学(如氏)』ゼームズ・ジョホノット (Johannot, James 1823-1888) 著: 岐阜: 郁文
- 堂, 明二十・一
- 教育学説史 オスカー・ブロウニング (Browning, Oscar 1837-1923) 著, 山本義明訳注, 三宅雪嶺(雄二郎) 閱:
- 東京: 牧野書房, 明二十・七
- 教育学(魯氏) ヨハン・カール・フリードリヒ・ローゼンクランツ (Rozenkranz, Karl 1805-1879) 著, 国府寺
- 新作訳注: 東京: 牧野善兵衛, 明二十、二十三
- 教授学(麟氏) ゲ・ア・リンドネル (Lindner, Gustav Adlf 1828-1887) 著, 有賀長雄訳 東京 牧野善兵衛 明二十・
- 二十一
- 教育学詳解(如氏) ジョホノット (Johannot, James 1823-1888) 著, 松村保一, 池永輝次著: 東京: 池永輝次,
- 明二十一
- 教育学(波氏) ウェルレム・エチ・ペーン (Payne, William Harold 1836-1907) 著, 小林小太郎訳: 東京: 学
- 海指針社, 明21
- 応用教育論(虞氏) チャー・エム・グリーンウッド (Greenwood, James Mickleborough 1886-1914) 著, 能勢栄

訳・東京・石川商店、明二十二・五

初等教育学 ボボロフスキイ (Bobrowskii) 著、高須治輔訳・東京・金港堂、明二十三・八

○教授論(根氏) ガブリエル・コムペーレ (Compayre, Gabriel 1843-1913) 著、ダブルユー・エッチ・ペーン (Payne, William Harold 1836-1907) 訳注、能勢栄重訳・東京・金港堂、明二十四・二十五

教育新論 ジョン・スチュワート・ブラッケー (Blackie, John Stuart 1809-1895) 著、高槻純之助訳・東京・博文館、明二十五・四

普通教育学(格氏) ヘルマン・ケルン (Kern, Hermann 1823-1891) 著、沢柳政太郎、立花銑三郎訳・東京・富山房、明二十五・十二

教育学(斯氏) スピネー(スペンサー) Spencer, Herbert 1820-1903) 著、有賀長雄訳注・4版・大阪・三木佐助、明二十五・九

○教育精義 ヘルマン・ケルン (Kern, Hermann 1823-18919) 著、山口小太郎訳・東京・普及舎、明二十五・十一

○普通教育学(麟氏) グスターフ・アドルフ・リンデネル (Lindner, Gustav Adolf 1828-1887) 著、稲垣末松訳・東京・吐鳳堂、明二十六・九

○教育学 ヘルマン・ケルン (Kern, Hermann 1823-1891) 著、国府寺新作訳・新版増補・東京・河出静一郎、明二十六・十一

特殊教育学(格氏) ヘルマン・ケルン (Kern, Hermann 1823-1891) 著、沢柳政太郎、立花銑三郎訳・東京・富山房、明二十六・九

教育学(倫氏) ゲ・ア・リンドネル (Lindner, Gustav Adolf 1828-1887) 著、湯原元一訳・東京・金港堂、明二十

六・五

○応用教育学 ジオン・スエット (Swett John 1830-1913) 著、国府寺新作、磯江潤訳：2版：東京：成美堂、明二十六・六：「易解教育学」の改題

実践教育学 (埤氏) フリードリヒ・ヂッテス (Dittes Friedrich 1829-1896) 著、藤代禎輔訳：東京：牧野書房、明二十七・四

○教育学 (莱因氏) ウキルヘルム・ライン (Rein, Wilhelm 1847-1929) 著、能勢栄訳：東京：金港堂、明28・3

○ラインの教育学原理 ライン (Rein, Wilhelm 1847-1929) 著、湯本武比古訳：東京：山海堂〔ほか〕、明二十九・八

○教育要義 フリードリッヒ・アドルフ・ウイルヘルム・ヂーステルウエヒ (Diesterweg, Friedrich Adlf Wilhelm 1790-1866) 著、立柄教俊訳：東京：三育舎、明三十一・七

教育学 (幾氏) フリードリッヒ・キルヒネル (Kirchner Friedrich 1848-1900) 著、塚原政次訳：東京：富山房、明三十二・一

教育学教科書 (倫氏) ゲ・ア・リンントネル (Lindner Gustav Adlf 1828-1887) 著、湯原元一抄訳：東京：金港堂、明三十四・八

○教授法 ヌッテス (Dittes, Friedrich 1829-1896) 著、熊谷五郎、河口隆太郎訳：東京：大日本図書、明三十五・十二

○社会的教育学 パウル・ベルゲマン (Bergemann, Paul 1862-1946) 著、熊谷五郎訳：東京：金港堂、明三十五・七

教育学(ラッド氏) シー・テイー・ラッド (Ladd, Georg Trumbull 1842-1921) 著、浮田和民訳、中島力造閲、帝國教育会編：東京：三省堂、明四十・七

【解説書】

フレーベル (Frobel, Friedrich Wilhelm August 1782-1852) 氏教育論 東基吉解説：東京：育成会、明三十三・十二
○キルマン (Wilmann, Otto 1839-1920) 氏教化学 熊谷五郎解説：東京：育成会、明三十三・
○ライン (Rein, Wilhelm 1847-1929) 氏教育学 波多野貞之助解説：東京：育成会、明三十四・
ラウリー (Laurie, Simon Somerville 1829-1909) 氏教育学 黒田定治解説：東京：育成会、明三十四

二・七 教育学史文献の一部

明治時代教育史文献

教育史は教育学の教科に指定されていた関係上教科書用の著書が多い。従って、明治時代の教育史に関しては内容的に穏当な通説が多い。又著作の年月によって内容は当然取り扱う範囲の年代的幅が異なる。教育史は日本教育史ばかりでは無く、西洋教育史を含み、著書によっては、東洋(主に中国)教育史をも含むものがある。穏健な通説とは学制と学風の変遷を学制期・教育令期・学校令期の各期について論述する「三期説」である。この「三期説」は学者が歴史的評価を十分出来なかつた時代的制約から生まれた学説であつたといえる。

【○印著者は哲学館・東洋大学教員経歴者】

【▽印は日本(東洋)通史、他は日本と西洋との通史】

▽日本教育史略…〔東京〕 文部省，明十・八

内容…概言（モルレイ（David Murray 1830-1905）著，小林儀秀訳） 日本教育志略（大槻如電（修二）編，那珂通高訂） 文芸概論（榊原芳野編） 附録…文部省沿革略記（妻木頼矩）

▽日本近世教育概覧〔東京〕…文部省，明二十・十二【佐藤誠実編『日本教育史』の典拠】

明治五年～明治二十年の教育制度、行政、学校の沿革を概説している。

▽日本教育史…佐藤誠実編，文部省総務局図書課校…大日本図書，明二十三・二十四

第七篇 慶応元年—明治二十年 第一冊は神代～後陽成天皇時代、第二冊は後陽成天皇時代～明治二十年までの通史。

教育史…高橋章臣著…東京…博文館，明二十六・七

一、日本教育史（第一章～第六章）二、西洋教育史（第一章～第五章）

第六章 明治の教育 【学制・教育令・学校令の三期説（以下三期説と呼ぶ）】

○内外教育史 能勢栄著…東京…金港堂，明二十六・十一

第一編は日本教育史（一章～十五章）第二編は西洋教育史

第十五章 維新以後の教育 四十五・学問教育の隆盛・四十六・維新後の学風

○▽内国教育史要 高島平三郎編，西村正三郎校…東京…普及舎，明二十六・六

太古・中世・近世の三部。近世の乙 庶民教育 明治維新期の教育施設の概説。

内外教育史…西村貞，岡村愛蔵編…東京…新山七之助，明二十九・六

第一編 日本教育史、第二編 東洋諸国教育概説、第三編 西洋諸国教育史

第一編・第十章 明治の教育

○▽日本教育史 高島平三郎著・東京・帝国通信講習会、明三十二・三

第二編 上古〜現代（第四章〜第七章）第七章 現時の教育【『教育史講義』と同じ】一、社会の傾向 二、教育に関する出来事及び施設【三期説】

新編内外教育史 育成会編・東京・同文館、明三十三・一

第二章 日本教育史（上古〜徳川時代）、第三章 西洋教育史、第四章 明治の教育。【学三期説】

▽近世教育史論 笹川潔著・東京・普及社、明三十三・四

第一章〜第四章（近世の教育〜明治維新以後の教育）。第四章 維新以後の教育は学校制度の沿革の概説。

▽教育史教科書・市川源三他二名編・東京弘文館〔ほか〕、明三十四・十一

第一章〜第十章（上古〜明治時代）。第十章 明治の教育。一、学制、二、教育思想（米國教育の影響、心性開發主義、教育勅語、ヘルバルト氏の学説）

○師範教科教育史 田中治六等著・東京・同文館、明三十五・四

第二編 本邦目下の教育、第三編 日本上古（第一章〜第八章）西洋教育（第九章〜第十二章）、第十三章 明治維新以後の教育（教育官庁、学校、教育法）、第四編 西洋目下の教育

普通教育史綱・岩田静夫編・東京・金港堂、明三十五・八

第一編 西洋の教育、第二編 東洋の教育 第三編 日本の教育・第二十九章 明治の教育 第三 明治の教育（学制、学校、教育行政）

教育史教科書 中島半次郎著・東京・金港堂、明三十五・三

日本の教育（第一章～第六章）、西洋の教育（第七章～第十一章）、第十二章 明治維新以後の教育【三期説】

教育史綱要 阿部莊二著・東京・大日本図書、明三十六・五

第一編 維新以前の教育・古代～徳川時代（一～五）、第二編 西洋の教育・希臘～現代（一～九）、第三編・

一 概説（学制、教育思想）二 学校の沿革

教育史要・津田元徳著・東京・金港堂、明三十六・五

第二編 日本・支那の教育・古代～徳川時代（第一章～第十四章）、第三編（西洋古代）第四編（西洋中古）、第

五編（西洋近世）西洋の教育、第六編 明治維新以後の教育（第一章～第六章）・学制、学校、学風、教授法

【三期説】

教育史眼 原安馬著・東京・金港堂、明三十七・四

第一編 民族固有の教育、第二編 儒仏渡来以後の教育、第三編 西洋思想東漸以後の教育・第一、西洋教育

の沿革、第二、維新以後（第一章～第四章・学制、学校の変遷、第五章・学風の変遷）【三期説】

○教育史 小泉又一編・東京・大日本図書、明三十七・二（前出）

第一編 維新以前の教育（第一章～第六章）、第二編 西洋教育史（第一章～第五章）、第三編 維新以後の教育

（第一章・学制の変遷、第二章・学風の変遷）【三期説】

教育史【第一冊】上・日本及支那之部（第二冊）下は西洋） 土屋良遵編・東京・六盟館、明三十八

第一冊・第一章～第六章は日本と支那の教育を交互に説く。第七章 維新以後の教育【三期説】

実用教育史要 小平高明著・東京・大野富士松、明三十九・五

第二編 明治以前の教育（第一章～第七章）、第三編 西洋上古（第一章～第三章）、第四編 西洋中世（第一

章・第二章) 第五編 西洋近世(第一章、第四章)、第六編 明治維新以後教育の発達(第一章・学制の発達、第二章・教育学風の変遷)

○近世教育史 小泉又一編…東京…大日本図書、明四十・十二

第二篇 維新以後の教育

○明治教育史 野田義夫著…東京…育英舎、一九〇七(明治40)

【学制・学校施設を詳説した明治時代の唯一の書】

○近世教育史綱 野田義夫著…東京…同文館、明四十一・三

第一篇第二 明治時代の教育(前出)

明治教育思想史 藤原喜代蔵著…東京…富山房、明四十二・十一

【明治時代の単著】(前出)

近世教育史 下田次郎著…東京…同文館、明四十四・二

第四編 本邦維新以後の教育(前出)

○教育史概説 入沢宗寿著…東京…内外書房、大正十三

第三編 本邦明治維新以後の教育(前出)

二・八 教育学文献の一部

明治十三年の尺振八によるスペンサーの教育論 (Education : Intellectual, Moral and Physical 1860) 同十八年の有賀長雄、高嶺秀夫によるシヨホノットの教育論 (Principles and Practice of Teaching 1883) は、その後の同書の

翻訳とともに、我国教育論の方向を定めたものである。その方向とはスペンサーの教育論が示す通り智育、徳育、体育の「三育」主義である。同じく影響力のあつた伊沢修二の教育学説も米国のものである。これら米英の教育学説は明治二十三年まで教育界を支配した。

大きな変化は明治二十二年四月八日から明治二十三年七月まで帝国大学文科大学に「特約生教育学科」が置かれたことよつて起つた。この学科は中学校教員を補充する為のものであつて、文学士、理学士または文科大学と理科大学に於いて二科目以上の選科を修了した者は無試験であつたが、尋常師範と尋常中学の教員は試験によつて特約生となることができた。問題はこの学科のお雇ひ外国人教師ハウスクネヒト (Emil Hausknecht 1853-1927) がヘルバルト及びヘルバルト学派の教育学説を体系的に伝えたことである。第一回特約生は谷本富、山口小太郎、稲垣末松等十二人で、沢柳政太郎、大瀬甚太郎、湯原元一はこれを聴講している。これを機にヘルバルト及びヘルバルト学派の学説が隆盛を極めた。左の教育学文献表では明治二十四年〜明治三十三年著作がこのことを明瞭に示している。明治三十年代後半から明治四十年前半の著作は此れ等ドイツの教育学説を祖述するのではなく、各教育学者が各自の解釈に基づき、これを参考しつつ独自の論を展開している。著書の構成は、教科書と論書とによつて異なるが、概ね「総論・教育の目的・方法・場所・教育者」といった構成になつている。教育学書全体について特に附言しておかなければならないことは、教育学と心理学の密接な関係が強調されていること(例えば高嶺『教育新論』第二章・心意の諸力)、ドイツの教育思想の隆盛と共に我国独自の内発的な事項として、国家主義的教育思想の典型として教育勅語が徳育の中心に据えられたことである。

【○印著者・編者は哲学館・東洋大学教員経歴者】

教育学 浅野桂次郎著・東京・競英堂、明十六・十

教育学 伊沢修二著・東京・丸善商社、明十六・二

教育新論 森岩太郎編・〔岡山〕・岡山県師範学校、明十六・十二

改正教授術 若林虎三郎、白井毅編・東京・普及舎、明十七・正編初版・明治十六年六月刊

○教育新論 元良勇次郎著・東京・中近堂、明十七・四

教育学講義 和久正辰著・東京・牧野書房、明十九

教育学（第一一八） 能勢栄著・東京・通信講習会、明十九

○教育学 国府寺新作述、新谷鉄太郎記・東京・哲学館、明二十一、【明三十二と同じ】

哲学館講義録

○教育学 能勢栄著・東京・金港堂、明二十一、二十二

○教育学講義 国府寺新作著・東京・哲学書院、明二十二・三

教育学・大瀬甚太郎著・東京・金港堂、明二十四・十二

○日本教育論 日高真実著・東京・双々館、明二十四・四

○普通教育学 国府寺新作著・東京・酒井清蔵〔ほか〕、明二十四・二

○新編教育学 湯本武比古著・東京・普及舎、明二十七・十

○新教育学 能勢栄著・東京・金港堂、明二十七・八

○教育学 国府寺新作述、小原春琳記・東京・哲学館、〔明二十七〕・哲学館第7学年度正科講義録

- 教育学綱要 西村正三郎著・東京・普及舎、明二十七・九
- 実用教育学及教授法 谷本富著・東京・六盟館、明二十七・十
- 科学的教育学講義 谷本富著・東京・六盟館、明二十八・十二
- 教育教授概論 稲垣末松著 新潟県尋常師範学校教諭・相川町(新潟県)・佐渡教育会、明二十九・八
- 教育学講義 谷本富著・〔水戸〕・東茨城教育会、明三十
- 教育学講義大要 谷本富著、宮城県教育会中央部編・仙台・内藤弥一郎、明三十一・十二
- 教育学速記録 谷本富述、猪飼鉄太郎記・名古屋・愛知教育会、明三十一・十一
- 将来の教育学 谷本富著・東京・六盟館、明三十一・五
- 教育学教科書 大瀬甚太郎著・東京・金港堂、明三十一・十二
- 教育学原理 松本孝次郎述・東京・哲学館、明三十三・哲学館第一一学年度高等教育学科講義録
- 教育学講義録 谷本富述、広島県私立教育会編・広島・広島県私立教育会、明三十三・七・巻頭の書名・谷本教授教育学大要
- 新撰教育学講義 高島平三郎著・東京・帝国通信教育会、明三十四・十一
- 小教育学 樋口長市著・東京・同文館、明三十四・一
- 教育学講義 大瀬甚太郎著・〔高松〕・香川県教育会、明三十四・七
- 教育学 熊谷五郎編・東京・博文館、明三十四・十一・帝国百科全書
- 教育学 田中治六等著・東京・同文館、明三十五・一
- 新編教育学 松本孝次郎著・東京・成美堂、明三十五・四

- 教育学新教科書 松本孝次郎，小西重直著…東京…普及舎，明三十五・二
- 新編教育学教科書 大瀬甚太郎著…東京…金港堂，明三十六・五…教科用教育学全書
- 普通教育学 小泉又一編…東京…大日本圖書，明三十七・十…附録…小学校令摘要，小学校令施行規則摘要
- 教育学…小泉又一編…東京…大日本圖書，明三十七・二
- 教育学要義 松本孝次郎著…東京…啓成社，明三十九・八
- 教育学精義 森岡常蔵著…東京…同文館，明三十九・二
- 新教育講義 谷本富著…東京…六盟館，明三十九・十一
- 科学現時の進歩に基く教育学要義 稲垣末松著…東京…開発社，明四十・十一
- 近世教育学 稲垣末松著…東京…元元堂，明四十・九
- 教育学講義 溝淵進馬著…東京…富山房，明四十二・七
- 實際的教育学 沢柳政太郎著…東京…同文館，明四十二・二
- 最新科学的教育学 田中義能著…東京…同文館，明四十二・三
- 教育学教科書 湯本武比古，中沢忠太郎編…東京…開発社，明四十三・十一
- 实用教育学 立柄教俊著…東京…目黒書店，明四十三
- 新撰教育学教科書 篠田利英，西山哲治著…東京…三省堂，明四十四・九
- 教育学概論 野田義夫著…東京…同文館，大正四
- 教育学概論 春山作樹著…東京…帝国学校衛生会，大正十三
- 教育原理講義 国府寺新作述…東京…明治講学会，〔？〕…尋常師範学科講義録

三 哲学館(東洋大学)心理学・教育学担当者

この担当者の下限を昭和十四年まで広げた。特別な意図は無いのであるが、哲学館の出身者西山哲治に言及して置きたかったからにすぎない。

担当者二十九人中一七人が東京大学・帝国大学文科大学の卒業生であり、六人が高等師範・師範学校・師範学校の卒業生、私学の卒業生は元良勇次郎(同志社)、稲垣末松(慶応)、田中治六・西山哲治(哲学館)の四人であるが、明治期では元良と田中(主として大正期)のみである。東京外国語学校卒業の山口小太郎と米国パシフィック大学卒業の能勢栄は特異である。こうして見ると、哲学館の教育学・心理学担当者は東大系と高師系によつて構成されていた。この構成は明治二十八年の学科改正(教育学部と宗教学部の二学部制)を具現するものであり、教員と宗教家(主に仏教僧侶)を哲学的理念の下に教育・養成することを目的としていたと言える。

担当者の中では吉田熊次、高島平三郎は長期間在職者の双璧であるが、吉田熊次の業績については、国立国会図書館近代デジタル・ライブラリーでは非公開であるので、内容を確認することが出来なかつた。高島平三郎は心理学、教育学、児童教育、体育教育など活躍の幅は非常に広い。

なお左の表では、*印は東京大学・帝国大学卒業者(文学士)○印はその他の卒業者を指す。帝国大学文科大學選科生はその他に入れた。文学士の場合、殆どの人が大学・高等学校・高等師範学校・師範学校などの官立の教員、或は文部省官僚であつたが、○印の人物は多様であるので略歴と著書の一部を参考のために附加した。

氏名・(心理学担当年)・(教育学担当年)・生年没年・大学・その他卒業年の順。

○松本源太郎(M二一、二八)安政四年〜大正一四年

明治三八年山口高等商業学校初代校長、のち東京高等師範学校校長。

心理学(哲学館講義録)

*徳永満之(M二一)文久二年〜明治三六年

*国府寺新作(M二一、二二、二八)(教育学M二〇)明治一三年七月卒

教育学 国府寺新作述他, 哲学館〔明二一〕(哲学館講義録)

教育学 国府寺新作述他, 哲学館〔明二七〕(哲学館第7学年度正科講義録)

教育学 国府寺新作述, 哲学館〔明三二〕(哲学館第11学年度高等教育学科講義録)

教育学講義 国府寺新作著, 哲学書院, 明二二、三

*井上円了(M二二、二五、二八)安政五年〜大正八年 明治一八年七月卒

*岡田良平(M二二、二八)元治元年〜昭和九年

*沢柳政太郎(M二二、二五、二八)慶応元年〜昭和二年 明治二二年七月卒

○山口小太郎(M二五、二八)慶応三年〜大正六年(教育学M二五)慶応三年二月〜大正六年一月。明治十七年東

京外国語学校卒業。明治三三年〜三六年独逸留学。第一高等学校、学習院、東京外国語学校、独逸協会学校等

に於て教鞭をとる。東京帝国大学特約教育学科第一回生。

教育精義 ヘルマン・ケルン著他, 普及舎, 明二五、一

○元良勇次郎(M二八、三六)安政五年〜大正元年。同志社を経て、明治一六年渡米、ボストンのジョンホプキ

ンス大学においてPh.D.を得る。明治二十三年帰国、帝国大学文科大学教授。同二六年、心理学・倫理学・論理学
第一講座教授。

○能勢 栄（M二八）嘉永五年〜明治二八年。旧幕臣。明治三年渡米、オレゴン州ポートランドのパシフィック
大学を卒業。帰国後、長野師範学校、福島師範学校校長を歴任。明治一九年森有礼文部大臣の要請により文部
省書記官となり、ついで視学官となる。

○野尻精一（M二八）（教育学M二四）万延元年〜昭和七年。明治十年、官立東京師範学校へ入学した。明治一五
年同校中学師範学科を卒業、文部省御用掛となり普通学務局へ勤務した。明治一九年四月、ドイツ留学を命
ぜられて、官立ノイテェルレ師範学校の師範学科を修めた。明治二〇年ベルリン大学、明治二一年ライプツィ
ヒ大学で哲学・教育学を専攻した。明治二十三年六月帰国。同年七月に高等師範学校教諭に着任、同年九月帝国
大学文科大学において、教育学の講義。十月には、高等師範学校教授に着任。明治三〇年一二月、文部省視
学官。明治三二年一月には高等教育会議の議員。明治四二年一月、奈良女高師の初代校長に就任。

○湯本武比古（M二八、三四、三六）（教授法M三四〜三五）安政二年〜大正一四年。明治八年、長野師範学校飯山
支校に入学。本校で准訓導となり、次いで長野小学校に勤めた。さらに松本中学校に入学し、英語を学ぶ。そ
の後上京、東京師範学校に入学し、明治一六年一二月、同校中学師範学科を卒業し、同校助手となった。明治
一七年四月、文部省編輯局（局長は伊沢修二）に入る。明治一九年四月、宮内省御用掛となり、明宮東宮の小
学校教育に務めた。明治二二年七月、皇族教育の研究のためドイツに留学した。明治二六年八月に帰国し、同
年九月に学習院教授となり、かつ高等師範学校嘱託教授も務めた。

新編教授学 湯本武比古著、明二八、五

* 松本孝次郎 (M三〇, 三二, 三三, 三四, 三六) (教育M三三・教育哲学M三二)

明治三年〜昭和七年・明治二九年七月卒

教育学原理 松本孝次郎述, 哲学館, 明三三。(哲学館第11学年度高等教育学科講義録)

* 近角常観 (M三二, 三六) 明治三年〜昭和一六年・明治三二年七月卒。

* 高山林次郎 (M三二) 明治四年〜明治三五年・明治二九年七月卒。

* 塚原政次 (M三二, 三三, 三四, 三六) 明治五年〜昭和二一年・明治三〇年七月卒。

* 熊谷五郎 (M三二, 三三, 三四, 三六) (教育M三二〜三三・教育学M三〇〜三四・教育史M三四) 明治二年〜?

明治二八年七月卒・明治三四年独留学

* 吉田熊次 (M三三, 三六, S四, 五, 六, 八, 一五, 一七, 一九)

(教育M三三・教育学S二〜一〇・教育学概論S一六〜一八・教育行政S六, 八〜九・教育史S一九) 明治七年〜昭和三九年・明治三三年七月卒

【参考】

系統的教育学 吉田熊次著, 弘道館, 明四二, 一

社会的教育学講義 吉田熊次著, 金港堂, 明三七, 三

実験教育学の進歩 吉田熊次著, 同文館, 明四一, 一一 (教育学叢書・第二)

ベルゲマン氏社会的教育学及進化的倫理学 吉田熊次解説, 育成会, 明三四, 一 (教育学書解説・第八)

* 野田義夫 (M三三, T一〇) (教育T7〜9・教育学T10) 明治七年〜昭和二五年・明治三二年七月卒

* 春山作樹 (M三四, 三六) (教育学M三四, T一三〜S一三・教育史M三四〜三六) 明治九年〜昭和一〇年・明治三

三年七月卒

教育学概論 春山作樹、帝国学校衛生会、大正一三

○田中治六（M三六、T二、一〇、S一〇）（教育T二、七〇九・教育学T一三〇～S一三三・教育史M四一～四四、T一〇、S四〇九）

明治二年、長野県に生まれる。明治一一年上京、同二年明治英学校にて英学を修め、同時に哲学館館外員、同二二年館内員となり、同二四年七月卒業。同二六年、二七年文部省教員検定の倫理学及び教育学に合格。

教育学 田中治六等著、同文館、明三五、一

師範教科教育史 田中治六等著、同文館、明三五、四

○立柄教俊（M三六、四〇）新潟県魚沼の人。長く小学校長を勤めた後、上京し東京高等師範学校の研究生となり。一旦帰郷の後、東京師範学校の講師となる（谷本富の序文より）

*八木光貫（M三六、四〇）（教育M三九・教育学M三七・教育史M三六～三七、四〇）

明治三四年七月卒

○高島平三郎（M四〇、T二、一〇、S四、六、八、一五、一七、一九）（教育M三九、T二〇九・教育学M三九）

慶応元年～昭和二年慶応元年。明治一一年、一四歳広島県立広島師範学校福山分入学。明治一四年四月～明治一六年三月、神村小学校須江分校教員、松永小学校教員、金江町金見小学校教員。明治一七年九月～明治二〇年三月金江小学校校長、広島県師範学校訓導。明治二〇年二三歳、東京高等師範学校附属小学校教授掛補助。明治二一年二四歳、学習院教師。元良勇次郎に師事す。

*溝淵進馬（M四〇）（教育M三九・教育学M四〇～四一）明治三年～昭和一九年 明治二八年七月卒・明治三二年

独仏留学

* 渡辺又次郎 (M四〇) (教育史M40) 慶応二年〜?・明治二六年七月卒

倫理学 渡辺又次郎、一 哲学館, [明三二?] (哲学館第11学年度高等宗教学科講義)

* 田中義能 (T二) (教育学M四二〜T二) 明治五年〜昭和二年・明治三六年七月卒

○ 小泉又一・(教育M三九) 慶応元年五月生。明治十六年東京高等師範学校入学、同二〇年卒業。明治三三年東

京高等師範学校付属小学校主事。文部省視学官。明治三三年、教育学・学校管理法研究のため米独へ二年間留学。

教育学 小泉又一編, 大日本図書, 明三七. 二、普通教育学 小泉又一編, 大日本図書, 明三七. 一〇

○ 稲垣末松 (教育T二, 七〜九・教育学T一三〜一四・教授法T一〇) 慶応二年誕生・特約教育学科第一回生・慶応義塾

科学現時の進歩に基く教育学要義 稲垣末松著, 開発社, 明四〇. 一一

近世教育学 稲垣末松著, 元元堂, 明四〇. 九

社会的教育学綱要 パウル・ベルゲマン著他, 大日本図書, 明三八. 九

普通教育学 (麟氏) グスターフ・アドルフ・リンドネル著他, 吐鳳堂, 明二六. 九

モイマン氏実験教育学講義 稲垣末松述, 開発社, 明四一, 四二

○ 西山哲治 (教育学S二〜三, 八〜九・教授法S二〜一〇, 一二〜一四)

明治一六年〜昭和一四年。明治一六年二月〜昭和十四年十二月。哲学館教育学部第一回卒業生。卒業後、ニューヨーク大学に学び、帰国後東京巢鴨に私立帝国小学校を設立。

四 おわり

以上、明治教育思想変遷に関する諸説を基軸として、これに沿って、一、翻訳文献 二、教育史文献 三、教育学文献の我国における学者の成果の一部を表示し、最後に哲学館（東洋大学）の心理学・教育学の担当者を編年的に列挙した。これらは単なる基本資料であるが、論題に副うように、各表の相互関係が読み取れるように配慮したつもりである。三種の文献表は明治時代を中心とした我国における教育学の成果である。

哲学館（東洋大学）科目担当者の業績を三種の表でみると、翻訳文献では、国府寺新作が米国セステット『簡易教育学』（明治二六）を訳しているのは寧ろ例外で、明治二五年以降の業績を見ると、国府寺新作、山口小太郎、稲垣末松、能勢栄がヘルバルト学派の学説を翻訳し、熊谷五郎がベルゲマンの社会的教育学を紹介している。このように哲学館の外国の教育学説の紹介は時代の趨勢に乗って米国からドイツへ移ったことが推定される。教育史の業績は能勢栄、高島平三郎、田中治六、小泉又一の著書があるが、特筆するべき点はない。最後の教育学の業績は、典拠とした外国の学説や著者の立論の基本思想等内容を精査しなければ特長を述べることが出来ない。第三節の科目担当者の表で指摘できることは、明治二八年以降の哲学館（東洋大学）の教員は高師・師範系、つまり「非学士」が多くなっていることである。